



「日中研究者による東亜同文書院研究」

2007年7月28日(土) 10時～17時 愛知大学豊橋校舎記念会館3階小講堂

第1セッション 座長 藤田佳久教授

1. 葉敦平教授 (上海交通大学)
「中日の共同歴史研究による両国民の友好促進」
2. 藤田佳久教授 (愛知大学院長、東亜同文書院大学記念センター長)
「東亜同文書院と中国研究」
3. 蘇智良教授 (上海師範大学)
「歴史から経験と教訓を得る」
4. 馬場毅教授 (愛知大学現代中国学部長)
「東亜同文書院関係者の中国革命支援－孫中山と山田兄弟の関係を中心に－」

第2セッション 座長 葉敦平教授

5. 毛杏雲教授 (上海大学)
「彼らは中日友好のために奔走した」
6. 今泉潤太郎教授 (愛知大学名誉教授)
「華語萃編と中日大辞典」
7. 盛懿助教授 (上海交通大学)
「東亜同文書院の交通大学キャンパスの占用に関する考察」
8. 孫萍助理研究員 (上海交通大学)
「1937～1945年東亜同文書院の旅行に関する分析」

第3セッション 座長 藤田佳久教授

9. 欧七斤助理研究員 (上海交通大学)
「東亜同文書院の中国方面の研究に関する概要」
 10. 武井義和 P.D (愛知大学東亜同文書院大学記念センター)
「東亜同文書院に関する発表論文の動向」
- コメンテーター 栗田尚弥講師 (国学院大学)
「日中関係と東亜同文書院」

挨拶

司会(加納) おはようございます。本日はかくも暑い気候の中、多くの方々にお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。ただいまより、「日中研究者による東亜同文書院研究」

シンポジウムを開始させていただきます。私は本日の司会を仰せつかりました、国際コミュニケーション学部准教授、加納です。よろしくお願いいたします。

本日は長丁場で、朝早くから夕方までずっと続きます。なるべく早く進行してまいりたいと

思っておりますので、ご協力のほどよろしく願いいたします。レシーバーの使い方につきましては先ほどご説明したとおりですが、ご不安の方がいらっしやいましたらスタッフにお声がけください。

それでは、本日の主催である愛知大学を代表しまして、愛知大学学長、武田信照よりご挨拶申し上げます。

武田 本日の国際シンポジウムの開催にあたって、主催者側を代表して一言ご挨拶を申し上げます。テーマは「日中研究者による東亜同文書院研究」ですが、敗戦に至る数年間、東亜同文書院が上海交通大学のキャンパスを使っていた経緯もあり、両大学間の歴史的な関係を研究し、その研究成果の発表が一つの柱になっていると思います。

これについては、霞山会の提言によってその研究が組織されたと記憶していますが、霞山会は東亜同文書院大学の設立母体であった、同文会の後継組織です。そういう経緯から、両大学間の歴史的な関係についてきちんと整理し、相互理解を確立しておきたいという願いからそうした提言になったものと思います。

霞山会と上海交通大学との間で研究会が組織されたわけですが、東亜同文書院大学の後継校ともいえるべき愛知大学の研究者もこの研究会の中に加わり、両大学間の歴史的な関係についての研究が進められ、今日報告されるような結実を見たということではないかと思っています。

もう一つの柱は、東亜同文書院大学は大変ユニークな大学で、教育研究の内容も大変刮目すべき内容を持っているのですが、特に卒業生が行った中国の調査旅行が最近富に高く評価されてきています。そういう同文書院の教育研究の中身の研究が、今日のシンポジウムのもう一つの柱ではないかと思っています。

このようなかたちで大変地味で地道な研究ですが、日中間の大変微妙な歴史的な関係を含む関係について相互的な理解が深まっていくことが、日

中両国関係の今後の安定的な連携、協力にも結びついていき、そういう努力の一環になるのではないかと考えています。今日、こうした研究成果が本学においてシンポジウムというかたちで示されることを、大学としても大変喜んでいられる次第です。

最後になりますが、この国際シンポジウムのために海を渡って報告に来ていただきました中国の研究者の方々に対して、何よりも深くお礼を申し上げたいと思います。それからコメンテーターを引き受けていただいた栗田先生にも、併せてお礼を申し上げたいと思っています。

今日は大変中身の濃い、長時間にわたるシンポジウムになると思いますが、その成果のほどをじっくりお聞きいただければと思っています。以上、私からのご挨拶にさせていただきます。どうもありがとうございます。(拍手)

司会 続きまして、共催を引き受けていただきました財団法人かざんかい霞山会理事でいらっしやいます星様よりご挨拶をいただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

星 いまご紹介いただきました、霞山会常任理事の星でございます。どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

霞山会といいますが、皆さんあまりご存じではない方もいらっしゃるかと思います。ここに書いてありますように「かすみやまかい」と書きます。学長からも紹介がありましたように霞山会となって50年くらいの歴史を持っております。50年間、中国との教育、学術、研究分野での交流を実施してきております。そういう面では、地道であります。民間交流の一環として長い間継続して事業を展開している財団法人です。

ご承知のとおり、ここに「日中研究者による東亜同文書院研究」となっていますが、私どもは3年前から日中研究者による東亜同文書院の研究の事業を展開しました。これは、ここにも出席いただいている前北川理事長が提案され、交通大学の皆さん方、今日出席されている皆さん方とともに、

史実研究を実行してきたということです。

現在、日中両国間は日中研究者による日中歴史研究会を組織しており、8月3日から上海で、日本の中国関係の歴史研究者の皆さんが行って研究テーマについての話し合いを行うことにしているようです。しかし私どもは、すでに交通大学と3年前から史実研究を実施してきました。その締めくくりとして、去年の12月初めに上海で同じようなシンポジウムを開催しました。ここに出席されている交通大学の先生方全員と蘇智良さんもいらっしゃって、愛知大学からは藤田先生、馬場先生にご協力いただいて、現地に行ってシンポジウムを展開しました。

東亜同文書院については、中国でもいろいろな評価があります。しかし、上海交通大学のキャンパスの講堂で行われたシンポジウムでは、戦後、東亜同文書院の卒業生または在学生在が、日中間の政治、外交、経済関係で大きな貢献をされたという評価をいただきました。これは私としても非常にうれしいことで、もしこの場に東亜同文書院の卒業生、または当時在学されていた方がいらっしゃったら、この場でご報告しておきます。それが、私の事業の締めくくりの仕事の一環だと思っております。

日中間はいままで政冷経熱と言われていましたが、ご存じのとおり両国首脳相互訪問によって政治関係は若干温かみを帯びてきています。政温経熱といえるのかもかもしれません。しかし、最近行われていた高校生の交流も含め、まだまだ日中相互間の民間レベルの交流は非常に大事な時期にあると思います。こういう時期にシンポジウムを開催して、日中間の歴史の一環としての東亜同文書院大学と交通大学の史実研究シンポジウムができ、それによって相互の理解と友好が深まることが大いに期待されているところです。今日出ている先生方には一日ご苦労様ですが、その点も含めて、ご紹介、討議されることを期待しております。簡単ですが、私の挨拶に代えさせていただきます。

ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。それでは上海交通大学よりお越しの先生方を代表いたしまして、上海交通大学葉教授よりご挨拶を賜りたいと思います。よろしく願いいたします。

葉 武田信照 学長、星博人 常務理事、友人の皆様、ご来賓の皆様こんにちは。本日、私たち上海交通大学、上海師範大学、上海大学の何人かの教授たちは、愛知大学においてシンポジウムに参加しております。私たちは、昨年上海交通大学において東亜同文書院に関するシンポジウムを開きました。本日私たちは、上海で開かれたシンポジウムの継続というかたちでシンポジウムを開こうとしています。上海での会議は、上海交通大学と霞山会が行ったシンポジウムであり、交通大学と東亜同文書院の関係について、またそれにかかわるいろいろな問題について話し合いました。私たちは、いろいろな積極的な研究を通じて理解したところです。

中国の東亜同文書院の研究は、日本よりも遅れているといわなければなりません。研究者もそんなに多くはありません。スタートも遅く、資料の収集も始まったばかりです。そんな中、われわれは四つの面の問題に直面しています。まず交通大学と同文書院の歴史的な関係も一つの問題です。もう一つは、われわれ中国の学者の、東亜同文書院に対する研究状況がどうなのかということ。三つ目は、同文書院の重要な内容である旅行調査です。1937年から45年までの状況について、われわれも研究を行っております。四つ目の面としては、東亜同文書院の皆さんは年齢がすでに高くなっています。しかし交通大学に多くの感情をお持ちいただいており、多くの方が交通大学を訪問されておりますし、われわれも振り返っております。こうした人たちは、交通大学に対する友好的な仕事、多くの貢献をなされていて、われわれもそれを知っています。

全体的に申しますと、われわれ中国側はまだス

スタート段階にあります。この問題については、中日両国、人民の間の友好を促進するという原則で、また中国と日本の間でともに話し合うべき問題として歴史的な研究を行っており、そうした課題研究を行っています。

歴史というのは鏡です。歴史によって同文書院の過去を振り返る。その目的は未来に目を向けるためであり、今後の中日関係を健全に、より友好に発展させるためです。われわれの任務もそこにあります。われわれ双方の学者は、数年間の努力、研究をし、友好的な意見交流を行い貢献をしてまいりました。もちろん問題によっては異なった見方もありますが、これは正常なことです。われわれとしては、今後とも討論を通じていくつかの問題についてのコンセンサスが得られればと思っております。われわれは歴史をよりどころとしていくことが大事であり、より多くの成果を上げると信じております。

このような会議を開くことも簡単ではありません。愛知大学の指導者の皆様方、愛知大学でお仕事をされている皆様方、霞山会の指導者の方々は、今回われわれのために大きな仕事とたくさんの努力をしていただきました。そのことに感謝を申し上げます。会議の成功を祈ります。ありがとうございました。(拍手)

第1セッション

司会 それでは早速ですが、本東亜同文書院大学記念センターの所長、藤田教授を座長といたしまして、午前のセッションを始めさせていただきますと思います。ではよろしく願いいたします。

藤田 皆さん、改めましておはようございます。今日はこういう機会を得て多くの方々にお集まりいただきまして、大変ありがとうございます。先ほどは学長先生始め霞山会の星理事、ただいまは葉先生からお話しをいただき、大変ありがとうございます。

先ほども霞山会の星理事がおっしゃいましたように、この会のきっかけはいまから4年ほど前、われわれと上海交通大学の先生方との間で、歴史的な史実に基づいたかたちで書院の研究をしようということが始まりでした。昨年12月2日だったと思いますが、上海交通大学のほうで葉先生、毛先生等のご努力によりまして、われわれと中国の研究者の間でのシンポジウムを開きました。このときも朝から夕方まで研究が発表され、いろいろおもしろい研究の成果が発表されました。しかし、われわれ日本人側の研究者はわずか3人しか出席していなかったものですから、ぜひこれを日本でも再現したいとこの企画を立てましたところ、交通大学の先生方に快くお引き受けいただき、今日の会に至った次第です。

併せて、東亜同文書院大学記念センターが昨年文科省からオープン・リサーチ・センターに認定されました。これは文科省の高度化推進事業の一つで5年間認定され、その一環としてもこういうシンポジウムを開催できることになりました。すでに1年経過をしていますが、2年目の大きな事業としてこういうかたちで国際シンポジウムを開くことができるようになりました。なお昨年までの成果は、一部お金がいるものもありますが、昨年の年報を入口のところで無料配布しています。残部がどのくらいあるかわかりませんが、100部用意しましたのでご希望の方はお手に入れてください。

今日は長丁場ですが、午前中、それからお昼からは1回休憩をはさみまして午後まで続きます。もちろん質疑もありますが、それが終わりましたら学内のリュミエールというレストランで5時半から懇親会が行われます。これは無料になっております。今日ご発表の諸先生方といろいろお話ししたい方も多いと思いますが、ぜひそちらにもご参加いただいて、懇親を深めていただけたらと思っております。

われわれのセンターといたしましてもこれを機

会に書院の問題を通じまして、日中間の非常に多面的ではありますが、研究上での友好促進を図っていきたくと考えておりますので、今後皆さん方のご協力も合わせてお願いできたらと思っております。なお、われわれもこれを機会に、昨年からかなりいろいろなイベントを企画して進めておりますので、ご注目いただければと思います。少し挨拶が長くなりましたが、早速午前中の第1部の発表に移らせていただきます。用意をいたしますので、少しだけ時間をください。

司会 それでは、午前のセッションを始めさせていただきます。各発表は20分です。各発表のあとに質疑応答をはさみますが、時間はかなり限られていますので、この時間は単純な事実関係のみの質問をお受けすることにしまして、午後のセッションをすべて終わったところで質疑応答の場面を設けたいと思います。よろしくお願いたします。では午前のセッションを、藤田教授、よろしくお願いたします。

1. 「中日の共同歴史研究による両国民の友好促進」

葉 敦 平

藤田 引き続きまして、私のほうで午前中の司会をさせていただきます。今日のトップバッターですが、先ほどお話しをいただきました上海交通大学の葉先生からお願いいたします。テーマは、「中日の共同歴史研究による両国民の友好促進」です。それではよろしくお願いたします。

葉 東亜同文書院と交通大学、交通大学はもともと交通大学という名前ですが、いまは上海交通大学という正式名称になっています。その歴史ですが、交通大学というふうに当校の歴史を語っております。二つの内容について今日ご紹介したいと思います。

一つは、東亜同文書院と交通大学の歴史関係についてです。この関係はいくつか調べまして、大まかにいうならば二つの内容に分けられると認識しております。第一の内容ですが、1917年から1937年の20年間の歴史です。この歴史は、交通大学と東亜同文書院が隣同士の関係にあったというものです。同文書院は最初に南京に設立され、その後上海に引っ越しをして来ました。上海でも、最初は場所を借りて運営していました。そして徐家匯というところに移ってきました。これが虹橋路の東亜同文書院の校舎になります。この虹橋路

ですが、同文書院と交通大学とは当時本当に近い距離でした。いまは華山路というところですが、まさに道一つを隔てた関係で、隣同士というのにふさわしい場所にあったわけです。

この20年間、双方にはいろいろな親しい行き来がありました。特に当時の両校の学生たちの交流は密接に行われていました。私たちの調査によりますと、主な行事で三つあります。最初の交流は、社会や政治運動に参加をしたというものです。書院の中華部にも学生会があり交通大学にも学生会があったわけですが、両校の学生会はいずれも上海学生連合会に加盟していました。この二つの学生会はお互いに協力をしながらいい関係を保って、いろいろな活動に参加したのです。たとえば、貧しい学生たちがお金がない場合に、学生たちが組織立てていろいろな募金をする、チャリティーのようなことをしたりしました。

さらには、上海学生連合会の組織の改革です。上海学生連合会があったという話をしましたが、交通大学と同文書院は学生の代表を連合会に送っており、幹部をしていました。当時の連合会の執行委員には、交通大学の鐘森榮という人が出席をしました。同文書院側からは沈道叔という人が役